

### 『百年の孤独』 G・ガルシア・マルケス

「文庫化すると世界が滅びる」。ノーベル文学賞作家のガルシア・マルケスの代表作で、世界的な名著にかかわらず、いままでずっと文庫化されずに「絶対に文庫化されない名著」認定されていた『百年の孤独』が突然文庫化され、バカ売れして話題になっています。没後十年を記念したのだそうです。でも、文庫化されたからといって読み通すことができたひとがどれだけ増えたことでしょうか？ 実はこの本、とっても読み通すのが困難な本なのです。せーやさんも挫折経験アリ。14冊もある『**失われた時を求めて**』ならともかく、ただの1冊にまとめられているのに。京極本のようにいたずらに大部でもないのに。非現実的な出来事がどんどん平気な顔をして現実を侵食していくマジック・リアリズムという手法のせいでしょうか。いやいや、なによりホセ・アルカディオの息子のホセ・アルカディオの息子のホセ・アルカディオが登場したりして、わけがわからなくなってしまうせいでしょう。ホセ・アルカディオ・ブエンディアとウルスラ・イグアランを始祖とするブエンディア一族が創設した「蜃気楼の村」マコンドの、草創、隆盛、衰退、そしてついには廃墟と化すまでの百年間を書きます。近親相姦の結果、近親者に豚のしっぽが生えた奇形児が生まれたため、いとこ同士であるホセ・アルカディオとウルスラは親族から結婚を反対されるが、二人はそれを押し切って結婚。ただし、豚のしっぽの子どもが生まれるのを恐れ、性交渉は控えていたところそれをバカにした男をホセ・アルカディオは殺害。すると、殺された男が二人の前に現れ続けたため、故郷を離れてジャングルを放浪したのちに、新しい住処マコンドを開拓する。「そこは、ほんとうに幸せな村だった。三十歳を越えた者はひとりもなく、死人の出たためしもなかった」。やがて、村は小鳥たちの合唱であふれた。その声をたよりにジプシーたちが村を訪れるほどだった。ジプシーが村にもたらした驚くべきもの — 磁石、望遠鏡、レンズ、いずれもホセ・アルカディオを夢中にした — のなかに氷があった。ホセ・アルカディオの息子が銃殺隊の前に立って、父親のお供をして生まれて初めて氷を見たことを思い出すシーンから、「終わり」を書いたこの長い物語は始まります。

## 『告白撃』 住野よる

異性の親友が結婚するのを心から喜べる、そんな大人の物語。あの『キミスイ』からはや9年！あの小説の主人公は高校生でしたが、今作はアラサーの仲間たちです。友だちの部屋に入り浸って、ゲームをやって、お酒を飲んで、ジャンクな食事をして、とめどなく話して、眠たくなったらそのまま寝てしまう、大学時代。もしかして人生でいちばん楽しかったのはあの頃だと思っているひとがいちばん多いのかもしれないとき。「きっと皆がそれぞれに持っている記憶の欠片かけらを集めて、ようやくあの日々になるのだろう」。それから、十年。就職したり、結婚したり、それぞれが様々な経験をして大人になっていきます。三十歳を目前に婚約した千鶴は、リモートでゲームをしながらそのことを友人に告げます。彼はすでに結婚しているのですが、お互いの親友である響貴にどう伝えようか悩んでいます。響貴はあきらかに彼女のことを好きだからです。彼が想いを引きずることのないよう、千鶴は響貴に告白させて、断ろうと企みます。千鶴も響貴のことが大好きだから。友人以上恋人未満の関係といいますが、この作品では恋人以上の友人関係が書かれます。住野よるさん自身がきっとすばらしい学生時代を終えて大人になったんだらうなと納得させられるきゅんきゅんの感動作！

## 『六月のぶりぶりぎっちょう』 万城目 学

「まあ、そんなことがあってもいいんじゃないかな。京都だし」。なんと直木賞を受賞した『八月の御所グラウンド』の続編が早くもリリース！京都を舞台に時を超えた奇跡が起きるく～月の京都>シリーズがこれで4月分集まりました。この本には「三月」と「六月」が収録されています。大学入学と同時に京都の寮で生活することになった私。寮は壁面にびっしりとツタが絡まりおどろおどろしいオンボロ寮だった。「京都にある寮だしなあ」などと勝手に納得していたのだが、寮で使われている言葉は独特だった。古風なのだ。たとえば、寮生のことを「によご」（女御）と呼んだ。中庭つぼねのことを「壺」（桐壺の壺だ！）と呼び、女御たちの部屋を「局」と呼ぶ。京都でもこんな呼び方をしているのはここだけだった。寮には昔からずっとここで暮らしている女御がいて、なんと14回生以上にもなると噂されていた…。六月の方は、「本能寺の変」のお話。タイトルの「ぶりぶりぎっちょう」がわけがわからないですが、子どもの遊びで、木製の槌つちをつけた杖で、木製の毬まりを相手の陣に打ち込むのだそうです。そのおかしい響きのおもちゃを研究している日本史の女の先生が、これまた京都ならではの不思議な体験をします。

## 『笑う森』 荻原 浩

富士の樹海よりも広いのにもかかわらず「小樹海」と呼ばれ、自殺の名所として知られつつある「神森」で、5歳のASD（自閉症スペクトラム障害）の少年が行方不明になった。ASD児には、人とのコミュニケーションが苦手で、物事に強いこだわりがあるという特徴がある。シングルマザーの岬は、息子の真人がテレビで「合体樹」（複数の木が絡み合っているために、ひとつに見える木）が紹介されているのに釘付けになっているのに気づき、真人に実物を見せてあげようと思って神森を訪れる。ところが、ぽかんと口を開けて合体樹を見上げる真人の隣で写真を撮った一瞬のあいだに真人はいなくなってしまったのであった。何かに夢中になったらまっしぐらの彼はいったいどこへ消えてしまったのだろう。必死に探したが、どこにも姿がなかった。名前を呼んでもすぐに答えるような子ではない。森のなかのせいかGPSも反応しない。行方不明のまま1週間が過ぎた。諦めムードが漂うなかで、真人は発見される。そして、「クマさんが助けてくれた」とだけ話したのだという…。

## 『ビブリオフィリア・ラブソディ あるは本と本の間の旅』

高野史緒

タイトルを見て、QUEENの「ボヘミアン・ラブソディ」を想起した人もいるのでは？「ビブリオフィリア」とは、本が好きで好きでたまらない人のことで「愛書狂」とも訳されます。タイトルは「ビブリオフィリア」となっていますが似たような意味でしょう。「ラブソディ」は「狂詩曲」。寄せ集めの歌の意です。というわけで、タイトルは「愛書狂のラブソディ」ということになります。内容は本にまつわる話ばかりで1冊になっています。「読書法」なる法律が施行され、ごく一部の名作以外は6年で完全に抹殺されてしまう世界を描いた「ハンノキのある島で」。正確に訳すことが限りなく不可能なマイナー言語・南チチ語による文学の日本でただひとりの翻訳者の物語「バベルより遠く離れて」。あらゆる小説を切りまくる辛口の文芸評論家が書店で「絶対に書評できない新刊」に出会う。それは、彼自身が若いころに書き、誰にも見せずに処分したはずの小説だった…「木曜日のルリユール」。「天才美人女子大生」とかつてはちやほやされたが、現在はまったく書けなくなってしまった詩人のたったひとつの願い「詩人になれますように」。二人の愛書家が巨大な古書店をさまよう「本の泉 泉の本」。以上、本にまつわる短編5話を、最初と最後に置かれた、いろいろな書き手のもとを巡っていくダブルクリップの挿話がまとめます。

### 『アトム的心臓 「ディア・ファミリー」 23年間の記録』 清武英利

大泉洋が熱演し、『ディア・ファミリー』というタイトルで絶賛公開中！「妹のよんちゃんは生まれつき心臓が悪くて、長くは生きられない、と言われていました。そのよんちゃんが足手まといだ、みたいな話をする人がいて、それを翌日、家で一緒に積み木をやってるときに、急に思い出しました。私はいいました。『よんちゃん、絶対死なないでね。アトムみたいにさ、そういう鉄の心臓をさ、誰かに作ってもらって、絶対に一緒に生きようね』。その誰かがまさか自分になるなんて、父親・宣政はまったく想像しなかったことでしょう。宣政の3人姉妹の真ん中の佳美は生まれながらに心臓に疾患を抱え、「手術は不可能」だと告げられ、「余命十年」を宣告されてしまう。宣政はビニール樹脂を加工し、ホースやビニールロープ、縄跳びなどを制作する町工場の社長であり、医療にはまったくの門外漢だったが、自らの手で人工心臓を作ることを決意する。「素人にできるはずがない」。言葉どおりゼロからのスタートで、いきなり最先端医療器具開発をめざすという、まったくもって無茶な話だが、宣政夫妻は本気だった。ただ「娘の命を救いたい」という一心で、人工心臓の研究へと励み、必要とされる莫大な資金を湯水のように注いでいくのだった。しかし、あらゆる医療関係者にはそっぽを向かれ、金銭的にも厳しくなり、時間ばかりが費やされていく。それでも諦めずにいた彼らに、自分らの専門である技術を生かしてカテーテルを開発する道が開けていく…。

### ☆『映画とポスターの本』 ヒグチュウコ 大島依提亜<sup>いであ</sup>

なんて美しい本！こんなに美しい本は世界でもそうないでしょう。あのヒグチュウコさんが自分が大好きな映画のポスターを（デザイナーさんと）本気で勝手につくりあげてしまった「オルタナティブポスター」をまとめた本。それぞれの作品についての想いも熱く語られています。とにかく思うのは、ヒグチュウコさんが本当に絵が上手だということ。彼女が描いたファン・アートは「本家」をかるがると飛び越えてしまっています！文字どおり、目が釘付けになるのです。どのポスターもすさまじく魅力的で、どんな映画なのか観てみたいくなります。

————— 今号の図書館通信が出るまでにずいぶんと時間がかかってしまったのは、『百年の孤独』を読破するために、はてしなく時間を費やしてしまったからです。読み終えたときには、季節が変わっていました。では、図書館で。